

## 後京極摂政と三十六番相撲立詩歌

原 田 芳 起

## 一

「三十六番相撲立詩歌」に関しては、「群書解題第十」の中で、それが後京極摂政藤原良経の自撰詩歌合と見るべきであることをきわめて簡単に解説した。それが良経の自撰詩歌合であることを認めるならば、従来ほとんど無視されて来たこの詩歌合は、かなり大事なものと扱うべきではないか。内容を調査してみると、いろいろ面白い点があるので、前稿をきわめて短いあらすじに過ぎなかつたので、具体的に補足して報告し、兼ねてそこから考えられる事柄の二三を記しておきたい。

この「三十六番相撲立詩歌」が良経のものであらうということは、何も面倒な考証によつて始めて知られるようなものではなく、その中に番えられた和歌を一

見すれば明らかであるので、一条兼良の「文安詩歌合」の一番の判に記した「中比建仁の摂政此道を下に広め侍りし」は、具体的にはこの詩歌合の存在を指していたものであらうと考えられる。

この詩歌合の和歌は三十六首残らず良経の作品である。和歌が全部彼のものであることと、作者名を全く記さないことは、彼自からが選歌したものであることを示す。したがつて番われた詩句もまた彼のものであることは疑う余地はない。

兼良は、前記判詞の冒頭に、

詩歌合といふものは上古にもありけんをしるし伝へざりけるにや。中比建仁の摂政此道を下に広め侍りし後、元久の上皇そのしるしを上へのべましましけり。

と言っている。後京極摂政に詩歌合の業跡があつたことは確かである。それがこの「三十六番相撲立詩歌」を指すことは信じられることである。

それでは著作年代はどうか。明徴をあげてこれを証することは今のところ出来ないが、多少の手掛かりは内部徴証によつて得られるかも知れない。

次の調査はもともこの詩歌合が誰のものかを知るために行なつたものであるが、成立の時を見当づけることにもある程度役立つであろう。

この詩歌合の中の和歌を、勅撰集に一致するものが有るかを調べ、良経の線がはつきり見えて来たので、家集「秋篠月清集」に検索し、さらに「六百番歌合」に当たつてみた。続群書類従本「三十六番相撲立詩歌」には誤植かと疑われるものもあり、誤りがかなりあるので、異文のあるところは校合する。「後京極殿御自歌合」との対照は最後に行なつたし、考えられる問題があるので別項に記す。

略号を、家集は「秋篠」、六百番歌合は「六百」、勅撰集は名の最初の二字または三字を「」に入れて示す。番われた詩は省略。

## 二

## 三十六番相撲立詩歌中の和歌

一番 余寒

空はなをかすみもやらず風冴て雪けにくもる  
春の夜の月

「新古」家の百首歌合に余寒の心を 「秋篠」歌合

百首 余寒 「六百」余寒十二番左勝

二番 花

春はみなおなし桜になりはてゝ雲こそかゝれ  
みよしのゝ山

「新勅」家に百首の歌よませ侍りけるに 「秋篠」

十題百首木部 ○二者とも第四句「雲こそなけれ」

三番 花

花はみなかすみのそこに移ひて雲に色つく小泊瀬の山

「新勅」花の歌よみ侍りけるに 「秋篠」治承題百

首 花

四番

けふこすは庭にやあとのいとはれんとへかし人の  
花の盛を

「続古」花月百首の歌人々によませ侍りけるに

〔秋篠〕花月百首 花

五番 春曙

みぬよまておもひのこさぬ詠より昔にかすむ

春の明はの

〔風雅〕左大将に侍りける時家に六百番歌合しける

に春曙を詠める 〔秋篠〕歌合百首 春曙 〔六百〕

春曙

二十九番左持

六番 残春

よしの山花のふる郷跡たえてむなしき枝に春風そ吹

〔新古〕残春の心を 〔秋篠〕歌合百首 残春

〔六百〕残春三十番左持

七番 舟中夏月

夏の夜をやかてあかしのかち枕浪にかたふく

月をしそ思

〔秋篠〕船中夏月

八番 蟬

なくせみのはにをく露に秋かけて木蔭涼しき夕暮の色

〔続古〕家の百首の歌合に 〔秋篠〕歌合百首 蟬

〔六百〕蟬三十番左勝 ○三者とも結句「夕暮のこ

ゑ」

九番 秋夕

物おもはてかゝる露やは袖にをくなかめてけりな

秋の夕暮

〔新古〕家に百首の歌合し侍りけるに 〔秋篠〕歌

百合首 秋夕 〔六百〕秋夕十一番左持

十番

真木の戸をさてあり明に成行をいく夜の月と

とふ人もなし

〔新勅〕百首歌の中に 〔秋篠〕治承題百首 月

○二者とも第一・二句「真木の戸のささで有明に」

十一番 女御入内屏風歌合坂関駒迎

東よりけふあふ坂の関こえてみやこに出る望月の駒

〔新勅〕文治六年女御入内の屏風に駒迎の所 〔秋

篠〕祝部 相坂の関に駒迎に行きむかふ所清水あり

十二番 鹿

たくへくる松のあらしやたゆむらむおのへにかへる

棹鹿の声

〔新古〕百首の歌よみ侍りけるに 〔秋篠〕十題百

首 獸部

十三番 秋月

山とをき門田のいなは霧晴てはなみにしつむ有明の月

〔続拾〕家の六百番歌合に 〔秋篠〕歌合百首 秋

田 〔六百〕秋田十八番左勝 ○三者とも第二句「  
門田のすゑは」

十四番 月

さらぬたにふくるはおしき秋の夜の月より  
西に残るしら雲

〔続拾〕家に月五十首の歌詠み侍りけるに 〔秋篠〕

花月百首 月五十首

十五番 薦

うつの山こえし昔の跡古てつたの枯葉に秋風を吹

〔新続古〕家にて歌合し侍りける時薦を 〔秋篠〕

歌合百首 薦 〔六百〕薦六番左勝

十六番 暮秋

しけき野は虫の音なから霜枯て昔の薄いまも一村

〔秋篠〕十題百首 草部 ○結句「今も一本」

十七番 初冬

月やとす露の夜すから秋暮てたのみし庭は

かれの也けり

〔秋篠〕南海漁夫百首 冬 ○第二句「露のよすかに」

十八番 冬

さひしきはいつもなかめの物なれと雲間の

みねの雪の曙

〔新勅〕冬の歌とてよみ侍りける 〔秋篠〕冬の歌  
よみける中に ○二者とも初句「さひしさは」

十九番 冬朝

雪ふかきみねの朝けのいかならん槇の戸しらむ  
雪のひかりに

〔新後撰〕家の六百番歌合に 〔秋篠〕歌合百首

冬朝 〔六百〕冬朝 六番左持 ○三者とも 初句

「雲ふ かき」〔岩波文庫本六百番歌合「雪深き」〕

二十番 山家

麓まておなしさゝ原跡もなし深山の庵の露のした道

〔秋篠〕山家の心を

二十一 山家

滝の音松のひゝきもはけしきにつれなく

あかす岩枕かな

〔秋篠〕山家の心を

二十二番 旧宅

古郷は浅茅か末に成はてゝ月にのこれる人の俤

〔新古〕百首の歌よみ侍りけるに 〔秋篠〕十題百

首 居所

二十三番 花

あはれなる花のこかけの旅ねかなみねのさくらの  
衣かさねて

〔秋篠〕花月百首 花五十首 ○第四句「みねの霞  
の」

二十四番 於住吉社即事

宮るせしとしもつものうらさひて神代おほゆる

松の陰哉

〔続古今〕家に百首の歌よせ侍りけるに 〔秋篠〕

十題百首 神祇 ○二者とも 結句「松の風かな」

二十五番 縁覚

おく山にひとりうき世はさとりにき常なき色を

風になかめて

〔新古今〕家に百首の歌よみ侍りけるととき十界の心  
をよみ侍りけるに縁覚の心を ○結句「風にながめ  
て」

〔秋篠〕十題百首 釈教十首縁覚 ○結句

「風に任せて」

二十六番 海路秋望

ゆく舟の跡のしら浪きえつきてうす霧のこる須磨の曙

〔秋篠〕雑部 海路秋望

二十七番

きよみかた波の千里に雲きえていはしく袖によする

月かけ

〔秋篠〕治承題百首 月

二十八番 海辺暁月

忘るなよいまはの月をかたみにて波にわかるゝ

沖の明舟 (明舟は朋舟か、自歌合参照)

〔秋篠〕海路眺望 ○結句「沖の遠舟」

二十九番 漢河原詠之

むかしきくあまの川原に尋きて跡なき水を

なかむはかりそ

〔秋篠〕物へまかりけるに天の川という所を過ぎ侍

るとて

三十番 別恋

わすれしの契をたのむ別かな空ゆく月の末をかそへて

〔新勅〕家の歌合に 〔秋篠〕歌合百首 別恋〔六

百〕別恋 三十番左勝

三十一番 恋

泪せく袖におもひやあまるらん詠むる空も色かわる迄

〔新勅〕百首歌めされける時 〔秋篠〕恋の歌よみ

ける中に

三十二番 待恋

よもきふの末葉の露の消かへり猶この世にと

またんものかは

〔秋篠〕歌合百首 待恋 〔六百〕待恋十七番左勝

三十三番 恋

吹風も物やおもふととひかはにうちなかわれは  
松の一声

〔秋篠〕五首の歌被講し中に恋を

三十四番 夜恋

みしひとのねくたれかみのをもかけに泪かきやる  
さよの手枕

〔新勅〕家の歌合に夜恋のころを 〔秋篠〕歌合

百首 夜恋 〔六百〕夜恋三十番左勝

三十五番 述懐

埋まれぬ後の名さへやとめさらんなす事なくて  
此世くれなは

〔続古〕百首歌の中に 〔秋篠〕治承題百首 述懐

○二者とも初句「埋もれぬ」

三十六番 寄先勤寺座主

なかき夜の更行月を詠てもちかつくやみをしる人そ先

〔新後撰〕題しらず 〔秋篠〕述懐

### 三

三十六首は全部家集「秋篠月清集」の中に発見することができた。良経以外の歌を含まないことは立証できたわけである。「六百番歌合」からは十一首を拾える。六百番歌合に出した百首は、勅撰等の詞書等から察しても、歌合のために新作したものにちがいないから、「三十六番相撲立詩歌」はそれより後の成立であり、それから十一首選んだものと見るべきは疑いを残さない。その他に百首の類から選んだと見られるのは、

治承題百首

二首

花月百首

三首

十題百首

六首

南海漁夫百首

三首

である。「十題百首」が比較的多いのは、それが作者の円熟期に近い頃の作で自信があつたことを語るものではあるまいか。「六百番歌合」の百首はさらにその倍数に近い十一首を採用していること、作者の年少習作期と見るべき「治承題百首」は二首にすぎないこと等から考えると、三十六首は自賛歌として選抜したものと見てよからう。

「治承題百首」からも二首採つてゐることも意味を持つて来る。それは「相撲立詩歌」の三十六首は、それを選んだ時においては、自己の全作品中から自賛の歌を選んだであらうということである。しかるにこの選歌中には「千五百番歌合」に提出した百首中からは一首も見出すことがない。これは「千五百番歌合」の行なわれた建仁元・二年の頃よりも前に成立したことを証するものであらう。

含まれる作品中、百首歌以外で作歌年次を推定できるのは少ない。六百番歌合のための百首はその歌合を建久四年とする説に従えば、歌の成立がそれよりさかのぼるとしても、歌合以前に他に用いることはあり得まいし、それから多少の時間を置かなければ自撰歌合等に転用することは不自然であらう。

「花月百首」は建久元年、「十題百首」は同二年、「南海漁夫百首」は同五年と、それぞれ製作年次が知られてゐる（和歌文学大辞典等による）。

三十六番目に歌われている「ながき夜の更けゆく月をながめても近づくやみを知る人ぞなき」は、「秋篠月清集」では「述懐」として八首連なつてゐるが、「拾玉集」では慈円の十首歌に和した十首の中の二つ

となつてゐる。その十首は「ながき夜の」一首以外は「月清集」には見えない。概して「拾玉集」に散見する良経の贈答歌は良経の家集に入つてゐない。その数は七十首にも達する。それはともかく、「ながき夜の」一首が慈円に和した歌であることは、「相撲立詩歌」にも「無動寺の座主に寄す」る由を題詞としてゐるのでもわかる。「月清集」の方では「述懐」の題で八首を連ねてゐるのは、編集の際の整理か。いずれにしても後者は、作歌事情とは無関係と見るほかはない。

良経が慈円の十首歌に和した事情は題詞によつて知られる。そこで注意されるのは、その題詞に「殿の大納言」と良経を呼んでゐることである。これがその年次を知る手がかりにはならないかを考えてみたい。

殿の大納言殿彼十首歌本歌再寂連和可御覧之由被示仍持参之令進訖其後又和遣其詞云「遣懐四明幽趣奉和十首之佳什 志賀都遣民」

読みにくい所もあるが、慈円がかつて寂蓮に十首歌を贈り、寂蓮が和した、それを良経が見たいと言つたので持参して進上した。その後良経が和する歌十首に詞を付して慈円に寄せたのである。意を主として読むと、

殿の大納言殿、かの十首の本歌、再び寂蓮が和したる、御覽すべきの由示さる。よつて持参し進らしめ訖んぬ。その後、和し遣はされたる、その詞に云はく、『懷を四明の幽趣に遣り、十首の佳什に奉和す。志賀都遣民』

となる。良経は臨時に、それも一迈きりのペンネームを多く使うのだが、『志賀都遣民』もその一つとなる。慈円の本歌は「拾玉集巻第五」の巻初の方にある、「文治五年九月寂蓮入道の許へ無動寺より遣はすなり」とした十首であることは、良経の和する歌との比較で明瞭である。彼に「大嶽」があればこれもそれを詠みこむというように各歌に対応が見られる。ただ、良経の和する歌は一首欠けて九首である。

「後京極殿御自歌合」ではこの「ながき夜の」一首に「座主無動寺に侍りける頃十首むかし歌つかはしける返事の中に」と題されている。「むかし歌」とあるから文治五年からかなり後のことになるのだろう。

そこで、「拾玉集」では、文治・建久の頃の良経に對しては、左大将・左將軍・左幕下などと呼ぶのが普通である。こゝだけ「殿の大納言」と書いたのは特殊であるが、内大臣となつた建久六年より前で、文治五

年からはかなり後ということだけはわかる。

#### 四

「三十六番相撲立詩歌」の成立が、おおよそ「六百番歌合」あたりより後、「千五百番歌合」よりは前ということとはわかつた。ここでもう一つ比較すべき資料がある。それは「後京極殿御自歌合」と呼ばれているものである。建久九年の成立と見られている。これも自選歌である点で性格が同じであるし、その内容を比較する必要があると思つて、群書類従本によつて調べて見たのであるが、「相撲立詩歌」中の三十六首全部が「自歌合」の百番二百首中に含まれて一首も余らないことを知つてむしろ驚かされた。両者に密接な本末的關係があることは疑いない。二百首中から三十六首を選び取つたものか、三十六首を増補して二百首として百番に組んだものか、この判断は容易ではない。ただし、それがいずれであつても、この「自歌合」と前後して比較的近接した時期に「相撲立詩歌」が成立したものであることは考えられる。

「後京極殿御自歌合」の中で「三十六番相撲立詩歌」に一致する歌の、番・左右・勝負・初句を抄記、それ



に應ずる「三十六番」の番の序数を示そう。

二番	左勝・そらはなほ	一番
九番	左勝・みぬよまで	五番
十番	右勝・春はみな	二番
十四番	右勝・花はみな	三番
十五番	左勝・けふこずは	四番
十六番	左負・よしの山	六番
二十四番	左持・夏の夜を	七番
二十六番	右持・なく蟬の	八番
三十一番	左負・物思はで	九番
三十三番	左持・たぐへくる	十二番
三十四番	左勝・さらぬだに	十四番
三十七番	右負・山 遠き	十三番
四十番	右勝・まきの戸を	十番
四十二番	左負・あづまより	十一番
四十四番	左勝・うつ山	十五番
四十五番	左持・しげき野の	十六番
五十五番	左負・月やどす	十七番
五十五番	左勝・雲ふかき	十九番
六十四番	右負・淋しさは	十八番
六十四番	右負・よもぎふの	三十二番

六十六番	左勝・なみだせく	三十一番
六十六番	右負・吹く風も	三十三番
七十番	左勝・見し人の	三十四番
七十三番	左持・忘れじの	三十番
七十七番	右持・宮居せし	二十四番
七十八番	右持・昔きく	二十九番
八十番	左持・忘るなよ	二十八番
八十一番	左負・ゆく舟の	二十六番
八十三番	左勝・きよみがた	二十七番
八十五番	右勝・あはれなる	二十三番
八十九番	左持・ふもとまで	二十番
九十番	右勝・滝のおと	二十一番
九十一番	左勝・ながき夜の	三十六番
九十二番	右負・ふるさとは	二十二番
九十五番	左負・埋もれぬ	三十五番
九十番	右勝・おくやまに	二十五番

右の中に判詞で勝としたもの十六首、持が九首であるが、負の歌も十一首ある。かならずしも勝歌を選び抜いたとは断じられない。しかし良経が二百首の中から自分のすきな歌を抜いて行つたと考えることが一審、適當な判断であるべく思われる。

もし右のように解すれば、「三十六番相撲立詩歌」は建久九年よりも後で、「千五百番歌合」の成立した建仁二年よりは前、三年ばかりの間と考えることができようである。その正治元年・二年という頃に、詩歌

番えたものであらう。この自歌合編著が機縁となつて三十六番詩歌も選ぶことになつたかも知れない。そつくりすべてを二百首中に求めたのは、それからあまり時が隔つていなかったからであらう。

会や詩歌合があちこち行われているようであるから、  
そういう機運に乗つた自撰詩歌合であつたのであらう。

これは披露の行事を伴つたものではなくて、しかし誰かに示して判を加えさせる意図はあつたものであらう。その判は実現せず、後京極摂政の自賛詩歌の意味で拡張つたものでもあらうか。

「後京極殿御自歌合」の方は「蒙其芳命、以愚詠所結卷也」とあるから、俊成に勧められて二百首を選び

## 昭和三十八年度講義題目

昭和三十八年度講義題目	萬葉集	安田喜一郎講師	平家物語	原田	芳起教授	
国文学史概説	土佐日記	原田	芳起教授	近代小説	安田	章生教授
国文学概論	源氏物語（賢木巻）	久保	重教授	近代詩	安田	章生教授
国文学研究	栄華物語	原田	芳起教授	国語学概論	竹内美千代教授	
詩歌史	堤中納言物語	竹内美千代教授		国語学史概説	原田	芳起教授
古代詩歌	宇治拾遺物語	山根	賢吉講師	国語法概論	原田	芳起教授
近世小説	方丈記	安田	章生教授	国語表現論	竹内美千代教授	
近代短歌	国文学演習			話しことば	泉田	行夫講師
国文学講読	源氏物語（玉鬘巻）	竹内美千代教授	国語教育		細川	馨教授

注）群書解題第十で62Pの「良経作たることの実証されるものが三十五首」としたのは、初句の文字の違いのために検索もれがあつたので「三十六首全部」と政め、従つて「しからば残る一首も云云」の一句は削除すべきである。同63P「六百番歌合からの一〇首」は「一首」に、「秋篠月清集三十一首」は「三十六首」に改める。「いずれにも見えないの一首云云」は削除。